



「信徒之墓地」改修工事を終えて

横山 良樹

二〇〇四年に伝道開始百周年を迎えた半田教会は、二〇二四年までの二十年間に、設備・施設面で大事業をみつつ行つたことを許されました。

ひとつは会堂耐震耐久工事で、ご存じの方も多いと思いますが、わたしたちの教会の会堂は、半田女学校の講堂を移築して、前後に事務室、母子室を加えた建物です。百周年が会堂建築からちょうど四十年目であり、阪神淡路大震災（一九九五年）以降の耐震基準に合致しているか、使用木材も百年を超えていたため、今後も会堂使用が可能などうかの検査が行われたのです。結果は強度不足と診断されたため、会堂内に家を一軒建て直すような耐震工事が二〇〇五年に行われました。十葺き瓦屋根を軽量に変え、基部から天井の梁を支える八本の支柱を据え、内部強化を行いました。この第一期工事のうえに、二〇一八年に会堂大改修工事が行われ、スロープや車寄せの設置、玄関改修、第二礼拝室増設、会堂椅子の取り換え、二階窓部分のデザイン変更で外観をすっかり変えてリニューアルしたことは皆様の記憶にまだ新しいことと思います。

そしてみつめが今回の墓地改修工事です。市

営北谷墓地内にある半田教会信徒之墓地は実にわたしたちの先達が戦後最初に取り組んだ大事業でした。発議は一九五九年で、実際の墓地完成は六一年、現住所の終町に牧師館が完成（六二年）、会堂が完成（六四年）する以前の事業でした。以来六三年にわたって八〇柱の信徒の遺骨をおさめ、春のイースターには墓前礼拝、教会学校の卵探しと、さいわいにも教会近くにも墓地が与えられていたため、よく用いられておりました。

しかし二〇〇〇年代初頭には、地下に造られた納骨スペースが将来の利用者を考えると手狭になつてきたこと、地下型納骨堂は管理が大変なこと、広い敷地の除草剪定作業に人手が足りないことなど、問題点が指摘されるようになりました。今になって考えると特注の納骨箱を依頼作成したことは大きかった。このサイズにあわせて納骨壇の設計が可能になったからです。教会員にアンケートを取り、あるべき墓地の姿を模索しました。この時期から「死と葬儀に関する懇談会・「ルターに聴く死への準備」などキリスト教の筋道で、死を福音的に理解する学びを心がけました。しかしこの墓地改修の実務はなかなか前進を許されませんでした。いちばんの問題は市営墓地内に宗教法人が墓地を所有していたことです。最初の墓地造営の時も、宗教法人半田教会では墓地用地の取得が認められず、教会員六名の連名で申請を行い、のちに使用权を教会に譲渡するという手段が取られました。この結果五六、五区画もの広い用地を取得していたのは今回の改修で改めて驚かされたことです。完成した墓地と旧墓地と比較しますと奥行の広さに皆さまも

吃驚されると思います。改修には当然、市に申請が必要でしたが、こういう事情で相談が出来なかったのです。その間にもわたしたちの教会は会堂改修に勤しんでいたのは前述の通りです。ところが二〇二二年に無縁墓地化や管理放棄地の増加に頭を痛める半田市環境衛生課墓地係より、正式に半田教会に墓地の承継を認める旨の連絡が来て、展覧会が一気に開けたのです。

墓地改修事業にあたっては墓地には異教的要素が混入しやすいため、これを信仰の問題、教会の働きとして取り扱うよう計りました。個人で墓地を所有している方もおられたので、教会堂のように皆にかかわる問題として受け止めてもらえず、受益者負担でやって下さいという空気になるまいよう細心の注意を払いました。

この二〇年で葬儀や墓地に関する意識もずいぶん変化しました。少子高齢化は言つてしまえば多死社会の到来です。コロナ以降、葬儀はやむを得ぬこととはいえ家族葬中心の遺体の処理に傾き、墓じまいがトレンドになるなど、人間に貸し与えられた命と体を大切にして弔い、神様にお返しする儀式的軽視が進んだように思います。また墓苑は家名の刻まれた個人の墓の集合体の趣きがありますが、本来は公葬スペースだと考えています。死んでまでプライベート化するよりも、人々が全体で故人を追想できるような、御国をしたう「墓地」として皆が憩える墓地をデザインと工務店の力を借りてかたちに残せたことを心から喜んでいきます。名前は天に記されていけばよいのです。「信徒之墓地」のみの奥ゆかしさを好ましく思います。

墓地改修工事

墓地改修を終えて

榊原 善夫

今回、墓地管理委員会の委員長にさせていただいたことは、これと言って役を担っていただく過ごしてきた私に、神様がしなさいと言われているようでした。形ばかりの委員長でもありました。

はじめは、まず新しい墓地が今の所で良いのか、個人名義の半田市共同墓地の土地を宗教法人が勝手に改装していいのかなど、課題が山積でしたが、横山良樹牧師が半田市墓地管理計画策定委員会の委員に加わる中、現在の土地を宗教法人名に変更して登録することができ、話がいつきに前に進みました。伝道開始一〇〇年の記念事業の位置づけでしたので、墓地の内容が決まる前に建設の日程が先に委員会内で決まり、慌ただしく事業が始まりました。

二〇二三年五月二日の委員会では、墓地のデザイン、建設の規模、そして施工業者等何も決まっていないうち、どの様に進めていったのか全く検討もつかず困っていた時に、私の消防団員の後輩で(株)沢田工務店の部長に相談したところ、相談にのっていただく事ができ、「当社にご依頼を頂ければ施工させていただきます」との返事を頂き、教会員の皆様にご承認を頂くことができました。

七月三十日に第一回の墓地に関する懇談会を開催することができ、絵に描いた餅が現実

化してきました。また資金の面でも巨額の建設費(税込一九三六万円)でしたが、想像を上回るほどの献金を捧げていただき、墓地の改修を終えることができ感謝をしています。

この事業を、初めから最後まで守り導いて下さった神様と教会員の皆様のお祈りによって、この工事を終えることができました。そして、過去に経験のない猛暑の中、工事が事故もなく順調に進み予定より早く完成をさせていただく事ができ、(株)沢田工務店様、(有)堀内建築研究所様に、心より感謝をしています。ありがとうございます。

信徒之墓地・納骨堂の設計監理にたずさわって

堀内建築研究所 中澤 賢一

二〇二三年五月、納骨堂の設計相談をいただきましたが、キリスト教徒でない自分が重要な施設を設計してよいものか迷いました。しかし、横山牧師と委員会の皆様と対面し、そのお人柄と納骨堂建設への熱意に触れることで迷いは晴れ、微力ながらぜひ協力したいという気持ちになりました。

その後、墓地を訪れると盛り上がった芝地の上で陽射しを一身に浴びる十字架の佇まいがとても印象的で、牧師の「キリスト教は墓地を主の復活の場として捉えていますので、嫌悪感や寂しい場所とは考えません。主を信じて眠りについた先達の復活の場という捉え方です」という言葉が思い出されました。そこで、新たな墓地は訪問者を優しく迎え入れ、

各々が想いを馳せることのできる場になりたいと思い至りました。

まず、敷地最奥(西)に訪問者を迎え入れ、受け止めるために、少し手を広げたような屏風型の壁を配置しました。古今東西の教会を見ても十字架の背後にある壁はステンドグラスであったり、天窗から降り注ぐ光を拡散したりと礼拝の場を作り出すために重要な要素です。領域が広がってしまいう屋外にあって、礼拝の場を生み出す装置としても屏風壁は必要でした。さらに入口(東)に向かって広がった敷地形状を利用して、屏風壁を中心軸に、訪問者が向かい合い、想いを交わせるようベンチを卵型にデザインし、墓地の空間(領域)を形作りました。その上で視線の集まる屏風壁の前に既存の十字架と納骨壇を配置して礼拝の場として設えます。納骨壇は予算・施工面でも効率的な四角いハコにもできますが、それではどうしても威圧的で、訪問者に寄りそうカタチにならない。塾考の末、屏風壁と十字架の中心から両端へ山形の傾斜を付けたデザインにたどり着きました。しかも、山型は四角の角を下げた台形ではなく、四角をそのまま斜めに傾けて、一部が地中に埋まっているイメージ、これは納骨壇がしっかりと地に根差し、埋骨された先達にもつながる、そんな想いから来たカタチでした。さらにその角度は両翼の傾斜を延長すると中心に立つ十字架の重心に重なるよう設定しました。今回、訪問者の視線や想いが一点に集中するよう、全てが求心性を持つよう配慮しています。コ

ンクリートの床に描いた石張りの十字もそのひとつです。つまり、墓地を構成する全ての要素が関係をもってひとつにつながるデザインを目指しました。

この初案を元に、教会員の皆様との議論でより良いカタチにブラッシュアップ（特に十字架が屏風壁の開口での表現になったことは大きな転換点でした）され、沢田工務店の方々の尽力により、二〇二四年八月に完成。十一月三日の納骨式で多くの方が集い、納骨堂を囲む様子を見て、当初思い描いた風景をなんとか表現することができたと安堵しました。今後設計者として見守らせていただきました。と思います。

墓地改修工事の進行について

藤條 聡彦

二〇二四年四月八日から始まった墓地の改修工事の進行について完成まで追ってみる。

四月、旧墓地の撤去、整地、測量。北谷墓地のあの急な階段が上がった一番奥に教会の墓地はある。作業のために機材、機械、軽トラ、ミニ重機まで下からクレーンでつり上げ運んだ。五月、ベース衝立、納骨壇、ベンチ、献花台に型枠が組まれ下からミキサ車でセメントを流し込む。距離があるため大変な作業であった。六月、床の十字架のクロス部に聖書などが埋められる。納骨壇にドア、化粧板が取り付けられる。床に再度セメント。七月、猛暑と蚊の攻撃の中、一気に工事はめ進められる。床の十字架が置かれ、旧墓地にあった

信徒之墓地の石板も再度設置される。ベンチ、献花台にも化粧板が付けられ、最終的なセメントが床面にながされる。そして全ての物の仕上げ。八月一日沢田工務店と最終チェック。チェック項目が修正され八月二二日に引き渡されました。以上の完成までは、写真でLINEのひいらぎに上げましたので御覧でない方は改修委員までどうぞ。

ほぼ毎日見てきた者の感想として、作業して下さった方々が神技の持ち主ばかり。正に神の業だったと書きながら思い返します。これらを全て用意して下さり無事に工事をおわらせて下さった神の恵みに感謝のみです。

お墓と私

篠田 顕

半田教会のお墓と、私の付き合いは長い。一九六一年の墓地が完成した時、私はまだ六歳であった。当時は教会墓地の回りは草茫茫の状態であり、どこからどこまでが教会の墓地なのか、全く解らないような状態であった。加えて小高い丘や、小魚がいる小さな池が三か所程あったので、子供であった私は大人が礼拝をしている間に、かくれんぼをしたり、池でフナ釣りをしたり、プラモデルの船を走らせたりしていた。要するに子供にとって、絶好の遊び場だったのである。ところが歳月が経つにつれ、お墓の回りの風景も変わってきた。そもそも教会のお墓しかない場所だった所が、隣近所にもお墓が建ち始め、その境界線も時を経るに連れて、ハッキリし

てきたのである。いつしか私が遊んでいた池は埋立てられ、小高い丘は削られて平地にされたのである。そして今年の百二十周年の行事の一つとしてお墓の改修がなされ、誰が見ても遜色の無い立派なお墓ができた。そして教会信徒や係累の方も含めてたくさんの方がこの墓地には眠っている。私の関係者で言うと、母方の祖父母と私の父母、そして私の妻の五人がこの墓で御世話になっている。そしてこのお墓の前には、私に通っていた思い出深い高校がある。教会からすぐ西のこの地域は、私の学生時代も含めて、思い出溢れる場所なのである。

墓地への思い

坂本 美世

改修計画が持ち上がった頃、「お墓なんてどんなものでもいい。」と無関心に考えていた。祖父母や曾祖母が入っていて、私自身教会員の一人であるにもかかわらず。しかし、計画が具体的になるにつれて、いずれ両親も入る墓地に対して、もっと関与すべきであると思い始めた。思い返せば、毎週のように祖父や両親は幼い頃の私を連れ墓地の手入れをしていた。特に祖父は墓地に対する思い入れが強かった。それは祖母が亡くなったことをきっかけに、祖父の人生が一変したことにある。詳細は省略するが、祖父は祖母の死によって信仰が与えられたのだ。祖父が当時の墓地作り発起人になったのは、そうした中のことであり、単に亡き妻の為というのではなく、

自身の信仰の証しとして、自分に出来ることをしたのである。因みに、佐見の家が夏季学校の為に用いられることになったのも、同じ流れの中にある。この度、埋骨の為取り出した祖母の骨壺から、祖父の思い（祈り）が書かれた物がでてきた。おもいがけず、信仰を得たばかりの祖父に出会えた。

墓地は祖父だけでなく、多くの方々の信仰や祈りによって受け継がれてきた。新しい墓地もまた、そうなっていくであろう。信仰の先達に思いを馳せながら、私も受け継ぐ一人になりたいと思う。完成に心から感謝！

天国の架け橋

竹内 喜保

今回埋骨させていただいた次女雪葉は一九七三年三月一六日に七カ月の未熟児で生まれまもなく亡くなりました。親として何もしてやる事が出来ず、戸籍に入れ、葬儀をするのがやっとでした。遺骨は、転会前の教会は墓地がありませんでしたので、翌年、日進市の「愛知牧場」、「まきば」に隣接する「十字架丘復活苑」に納骨しました。復活苑では毎年九月（当時は四月）の祝日に合同記念会が行われ、子どもたちと参加した時は、式の後に南山教会のバザー、牧場の牛など動物と触れ合い、楽しい一日を過ごした思い出がありましたので、転会後も半田教会の「信徒之墓地」への納骨も遅くなり、今回となりました。

墓地改修については、二〇〇〇年度当初から声が上がりましたが二〇年度の宣教実施目

標に掲げ、二一年度から墓地管理委員会が具体的に活動に入り計画し、改修募集献金額も満額達成し、完成に至った事は、委員の皆さんに感謝してみ名を褒めたたえます。記念礼拝当日は晴天に恵まれ、教会員、成井さん、木村さん、新美さん、藤條さん、篠田さんと私の家族が共に集められ、天に召された方々が半田教会を通して信仰の証しを歩まれたお姿を偲びました。また、毎月の聖餐式においてその月の逝去者等を覚え、地上での働きを感謝する事は、改めて大切と思いました。



墓地改修工事



10月20日（日） 遺骨を新墓地に戻しました

一二〇周年記念修養会

「祈り」

神原 有子

「一切の望みが尽きたところで神が働きたもう」半田教会役員会から出された二〇三〇年問題に対しての北牧師の言葉。万策尽きたとき？（いづれの御時にか）心の中に源氏物語の冒頭句がこだまして・・・夕礼拝にも出ようと思った。教会の高齢化ゆえに希望が持たない、という問いに北牧師の結論は「祈り」だった。平凡な答えと思ってしまった。夕礼拝とともに二つの説教を聞かせて頂いて、一番腑に落ちた言葉は、アブラハムのように、神様に参りました、と降参すること。自分を振り返ればどれだけ神様に逆らっていたか、また、どれだけ想像を超えたどんでん返しのような神様の働きを見させて頂き体験したとか、ここに神様、参りましたという心底のへりくだった気持ちがあったか？星を数えよ、と言われたことも「センス・オブ・ワンダー」。神様の創造の御業、恵みは数えきれない、今、生かされている恵み、人々に出会う恵み、空を見上げる恵み、心動かされることへの恵み、数えきれない。恐れるな、とも言われた。神様が私達を知って下さった、神様が盾となり守って下さる。アーメン、感謝、心強さ。夕礼拝の後で北牧師への質問の時があった。戦争の絶えない今、民族間の争い、力の支配、地球の事を考えない資本主義

経済今が一切の望みの尽きたところでは？と聞くと、「まだまだです」？？？そのまま、奥田からの帰り道、（いづれの御時にか）がまたこだました、しまった、紫式部さんにも降参。「いづれの」は長尺の目からの時空の感覚のはず。今かも、そして今後いつかの事として、神様の救いは必ず実現する、という確信。そして、三代目桂米朝師匠の落語のように、帰り道にオチが響いてニヤツとしてしまったような感覚。朝礼拝説教の結論「祈り」に平凡と思ってしまった自分。朝活は定期交読である岩波新書、政法大学教授田中優子氏の「昭和問答」最後に氏が今の時代に足りないものが「祈り」と結論付けられた。キリスト教と全く無縁と思われる氏。ご自分の母親の介護で、もうどうにもならない、と分かった時たどり着くものが「祈り」見守っているよ、ありがとう、が祈りとあった。私は自分の祈りに、いつももうそっぽさを感じていた。心底、はらわたから願っているのか？きれいごとではないのか？等々。三つの祈りに対しての点。三角測量ができた、祈りを判断されるのは神様。自分が価値を決めてどうする、降参していない自分がいた。「なすべきことは一つ、救いなる、慈しみなる神に祈ること。」北牧師の朝礼拝の説教。平凡な結論などと思ってしまったことが恥ずかしい。どんなことでも、言葉足りなくとも、かっこ悪いお祈りでも、自分勝手な祈りであっても、判断されるのは神様。説教で何度も教えられている、主語は神様。思いを新たにされた一二〇周年記念修養会の恵みに感謝いたします。

九月十五日 今日は一曰北先生

松田 喜代

「ブドウ園の労働者のたとえ」の箇所はまだたくさん説教で説き明かしを受けて、その時々を示されたことがありました。その時は理解していた気分になっていましたが、改めて北先生の説教で示されたことから理解して納得したことがありました。

私は受洗から約十年弱、自分のキリスト教の信仰について知識のなさや、礼拝の説教を受ける自分の感性に自信なく、教会生活が長い皆様と比較することもありました。しかし信仰の長さに関係なく、神様の恵みは与えられている。神様の恵みは平等である。

また修養会では、教会員の減少を嘆くよりも礼拝を大切にそれぞれが自己の信仰の力を高めることが重要。キリストの香りを放つ私となるのが、ひいては伝道につながるのだと思います。日々の祈りは、ついついおざなりなることが多く、私の課題だと感じているのですが、先生は「日常の生活の中で、神様を感じて神様を思っていることが祈りとなる」とも言われました。私の側には神様が伴走して下さっている、苦難の時も、逃れ道を備えて下さる、安心していいんだよと言って下さる神様が半田教会に招いて下さり、人生がとても豊かになりました。北先生の説教を拝聴しながら、改めて確認する一日となりました。ありがとうございます。

北 紀吉先生への思い

天沼 康司

北 紀吉先生とは初対面でしたが、昨年十月二十九日に私より二歳年上の加藤 誠牧師が六九歳で肝臓に癌が転移し天に召されました。その時に葬儀の司式を北先生がなされていたのでお会いしたいと願っておりました。

礼拝前にお話をして、加藤牧師が亡くなる数日前に本人から直接電話で葬儀の司式を依頼されたと聞き、とても北先生を頼りにしていた事を知りました。

北先生は今年度より教師を隠退なされ出身地の金沢に在住しておられます。修養会のレジメに「人には希望はない、ただ神にのみ希望がある」(無力なる者への憐れみなる神に希望あり) 私には日本基督教団の働きのなかでの思いを感じてしまいます。主は言われる「収穫は多いが、働き手はすくない」としかし、主は「あなたが働き手になれ」とは言わない。なすべきことは一つ、それは救いなる慈しみなる神に祈ること。とは言っても半田教会として何もしないで主の御業を祈り待っているだけにはならないでしょう。半田教会「信徒之墓地」が完成しました。次は北側隣接地の取得でしょう。その事にどんなメリツトがあるの?と聞かれます。現状、駐車場が不足しています。将来的には牧師館の建築が必要になります。そして、現状の牧師館改修。究極的には現在の土地を売却して移転する場合に立地条件が良くなります。もしくは、会

堂と牧師館を更地にして新会堂の建築ができません。主の御業を祈り続けております。



奥田センター夕礼拝後



北 紀吉隠退牧師

◆ 編集後記 ◆

今回、先ず本号に原稿をお寄せ頂いた方々に、心からお礼申し上げます。

ご承知の通り、北谷墓地における教会墓地建設が正式に決議されたのは、一九五九年(昭和三四)でした。もともと田口寅雄氏が奥様の召天記念として墓地購入費を捧げたいとのご希望により献地されたものです。(半田教会百周年記念誌(P二四、三〇四) 一九六一年に完成した教会墓地は、教会員の期待を背負い、その装いを新たにしました。

信仰の先輩方が慕うその地を「墓地」と言う、良樹牧師は仰いましたが、「言い得て妙」ではありませんか。

ところで、良樹・ゆずり両牧師が半田教会に招聘されて今年で三〇年目、長年にわたる牧会に感謝申し上げたいと思います。「歳月人を待たず」と、申しますが、本教会は来年創立一二年目という節目を迎えます。

神様、私どもを、北谷の大地に安らぎを得た後、神様の御許に赴くことの出来る者としてください。

最後になりましたが、墓地建設・墓地デザイン形成等ご尽力頂いた業者・関係者の方々に厚くお礼申し上げる次第です。(伊藤 敦)

